

## 冠動脈造影所見よりみた川崎病治療法の検討

日赤医療センター小児科 川 崎 富 作  
 同 放射線科 菌 部 友 良  
 古 川 隆

〔目的〕 川崎病突然死予防のためには冠動脈病変の発生防止が急務である、今回冠動脈病変を大動脈造影で検出し、正常者と異常者につき、その臨床症状の強さ及び治療法を検討し、最善の治療法を確立すること。

〔方法〕 全例大動脈造影を行い、臨床症状の強さの評価には浅井・草川のスコア表を用いた。治療法は、まずステロイド使用群と非使用群にわけ、その中で個々の治療法別に分類した。

〔対象〕 主として当院に入院し、その心臓症状の重いもの、他の合併症のあるものなど、臨床症状の重いものが多く、ランダムイズド・テストではない、全例両親の承諾を得て施行した。

〔結果〕 85例中冠動脈病変を有するは11例（13%）であった。浅井・草川のスコアとの関係は、スコア5点以下の群38例中異常者0例（0%）、スコア6～8点群27例中異常者6例（22%）、スコア9点以上の群20例中異常者5例（25%）であった。

治療法別にみると、ステロイド使用群30例（平均スコア5.7）中異常者4例（13%）、ステロイド非使用群55例（平均スコア6.2）、中異常者7例（13%）であった。サブグループ別の冠動脈異常出現率は①ステロイド単独治療…14%（1/7）②ステロイド・アスピリン…16%（2/12）③ステロイド・アスピリン・ワーファリン…10%（1/10）④ステロイド・ワーファリン…0%（0/1）⑤アスピリン単独…3%（1/31）⑥アスピリン・ワーファリン…26%（6/23）⑦抗生剤単独…0%（0/1）、であった。しかし各サブグループ間の平均スコアは同じでなく、冠動脈異常出現率の高い治療法サブグループのスコアは高く、各治療サブグループ別の評価にあたり、これらの点を考慮すると大きい有意差はなさそうである。

〔結論〕 浅井・草川のスコアは川崎病冠動脈病変の存在の予知に大いに有用である。川崎病治療法と冠病変出現頻度との間には、大きな相関はなく、どうも浅井・草川のスコアであらわされる臨床症状の重さに関係するようである。以後も症例を重ねて検討の予定である。

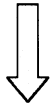
## MCLS における血清脂質、特に HDL-コレステロールの変動について

日本大学小児科 大 国 真 彦  
 岡 田 知 雄

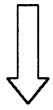
〔研究目的〕 近年リポ蛋白の研究が進み、リポ蛋白代謝の場が、肝及び腸管における合成と血管壁における異化として、知られるようになってきた。このようなリポ蛋白の代謝が、川崎病の中小動脈を中心とする血管炎、及

び臓器炎でどのように変動するかを調べ、川崎病の重症度の推定などに、役立つかを検討した。

〔方法〕 以下の項目について、病週別の変動を観察した。血清総コレステロールを、日立 500 オートアナライザー



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔目的〕川崎病突然死予防のためには冠動脈病変の発生防止が急務である,今回冠動脈病変を大動脈造影で検出し,正常者と異常者につき,その臨床症状の強さ及び治療法を検討し,最善の治療法を確立すること。